

東京物語

×× 上京する際に、もう二度と栃木には戻らない、いや戻る場所もないと覚悟を決めていました。両親の亡くなった地への帰郷は夢と消えました。今では信じられないでしょうけれど寮ではなく、経営者の家族と同居という形で、住み込みの修行時代が始まりました。まもなく秋に理容学校の通信制に入學しました。昼間生徒の夏休みの空き教室を利活用して、一か月だけ学校に通い、他の月はレポート提出という制度です。働きながら学費を捻出して二年間通い、理容師免許を取得しました。

毎日、お店で掃除や練習に明け暮れていたある冬の日、ストーブに石油を補給してうっかりして、自分のズボンに石油をこぼしてしまいました。急いで片づけをしていて、ストーブに着火したところ自分のズボンにも、火が着いてしまい下半身が炎で包まれました。慌ててズボンを脱ぎ捨てましたが、両足の表面の皮膚がただれて燃え落ちました。激痛で転がるほどでした。その時のやけどの跡は今でも、黒く残っていますが、気にしていません。周りも気を付けろというだけで夜、布団の中で痛みと悲しさで泣きそうでした。

察しました。忘れられない日でした。

それ以降の東京での張りつめていた生活が楽になりました。たまのお休みの日は、妄想デートをしていました。この公園に来たらここで手を繋ぐ、お茶はあのお店に行き、帰りになんとかチュまで行きたいなあ。笑えますね。おかげで都内の公園の地理には詳しくなりました。次は男女ともにお客様がいるユニセックスサロンに勤務しました。とても技術レベルの高いサロンで、一から技術の研鑽に励みました。朝練も夜練もして店長と一緒にコンテストにも出場しまくりました。お金のかかる日々でしたが楽しい毎日でした。でもあまりに熱中していて、恋愛は連戦連敗でした。仕方ないよね。

懸命に働いていましたが、突然社長から解雇を告げられました。理由は先輩に逆らったからということでした。S先輩が、私が作ったコームを勝手に使い壊しました。謝り方が軽かったのと、何日もかけて作ったコームへの愛しさで悔しさで喧嘩になってしまいました。解雇はあまりにも理不尽だと思いましたが、諦めて職場を後にしました。後輩たちが後日こっそりお別れ会をやってくれたのが嬉しかったです。理不尽この言葉は、誰にも味合わせたくない心に誓いました。

静かに暮らしたいと世田谷の野沢の高級住宅地の中にある理美容室へ勤務場所を変えたのですが、すぐに前の店の店長から、あの時はチカラになれなくてすまなかったと連絡

×× 人の容姿をとにかく言う事はいけないことだと実感する事件でした。そこのご主人が病に倒れたので次の店を探しました。次は華やかな美容師の世界へと思い、青山の美容室へ入り、また通信制で美容学校に通いました。生活費が少なく先輩に相談したら、『バツ』というブランドの服を頂けるバイトがあったので喜んで引き受けました。一年間を通してバツの靴からバッグまで、もちろん服を着て通勤するという日々で、すごく助かりました。通勤中に周りからじろじろ見られるのは、いつのまにか快感に変わっていきま

した。技術を高めたくて、カット技術のほかに着付けやメイクアップまで様々な研究会に出席しました。余裕のお金もなかったので、実践の練習に東京都の児童施設や浮浪者の収容施設、精神病院などボランティアカットに通いました。そこでの忘れられない場面があります。解放病棟の患者さんが庭のフェンスにしがみつき泣いていました。どうしたの？と聞くと「オレはバカだから、入院させられて以後、家族が一回も会いに来てくれない」と嘆いていました。ああ孤独とはなにか、自分のことを孤独だと感じていましたが、この方に比べれば。家族がいても感じる孤独のほうが辛いだろうと

があり、君を必要としている会社へ推薦しておいたのでオーナーと会ってみてと言われ早速行くと、50店もある理美容室チェーンに技術部長・新店開発担当として迎えられました。とてもやりがいのある職場でした。新店開発では新しく雇用した年上のスタッフたちに訝し気に見られました。技術を披露してリスペクトして頂き、フロントには丁寧な接客術をアドバイスして教育者として過ごしました。充実した毎日が永遠に続き、これからすこし恋愛も出来るかもと喜んでいたのも束の間、そこに、栃木の西那須野の叔母の訃報が届きました。人生は儘ならぬもの、大きな運命の流れに抗うことは出来ませんでした。悲しみに生まれ、失望を身にまとう人生が、続くのか、これでもかと押し寄せてくる嵐のなかへ向かっていきました。続く

(文 五番街代表 大倉太喜生)



hair design 五番街

TEL.0287-36-6811
那須塩原市太夫塚6-232-213